

5 外国語教育（英語・フランス語など）

*エジプトでは、小学校の 1 年生から英語を学びます。公立学校のなかにも、アラビア語で授業を受ける一般学校とは別に言語系のモデル学校(Official Language School, 実験校)があり、小学校段階から理数科目を英語で学んだり、英語の特別授業を受けたりします。言語系モデル学校では中学校段階になるとフランス語が第二外国語として加わります。高校の卒業試験でも外国語は重視されており、全コース共通のコア科目として第一外国語に加えて、第二外国語(仏語や独語)の試験を受けます。

*今日でもエジプトの学校教育で仏語は有力な外国語の一つですが、エジプトの教育の歴史自体がフランスと深い関わりがあります。エジプトと近代ヨーロッパが接触した最初期の象徴的な出来事が、18 世紀末のナポレオンによるエジプト遠征といわれます。フランス軍のエジプト占領は 3 年程度でしたが、フランス占領軍に同行した学者の学術調査は考古学や東洋学の研究を大きく進める契機になりました。フランス軍の将校がナイル川河口の町ロゼッタでロゼッタ石を発見し、シャンポリオンの解読でヒエログリフなどの古代エジプト文字の解読が可能になりました。その後も、エジプトとフランスは学術的な交流が長く続くこととなります。エジプトで最初の近代大学の博士号取得者となったターハー・フサインら多くのエジプト人エリートはフランスに留学しました。また、今日でも、スンニ派イスラームの最高位の学識者であるアフマド・タイブはエジプトの宗教大学であるアズハル大学卒業後にソルボンヌ大学に留学するなど、フランスとの国際的な学術交流は続いています。

*フランスと並んで教育・学術分野での深い関わりを持ってきた国がイギリスです。1882 年のアラビー運動鎮圧をきっかけとしたイギリス軍の軍事占領は長期間に及び、ナセルが大統領に就任した後、1954 年まで続きました。特に英国からの独立までは、エジプト大学(現在のカイロ大学)でも各学部の学部長は欧米出身の専門家が務め、文系理系を問わず、外国語による教育が多くの学部で行われました。また、今日でも、カイロ・アメリカン大学をはじめとする一部の私立大学は英語などの外国語教育と国際交流に重点をおいた指導方針によって、現地の人々から一定の支持を受けています。

*エジプトの学校教育においては外国語「を」学ぶということだけではなく、特に専門的な内容を学ぶという場面では外国語「で」学ぶということが重視されてきました。他方で、外国語教育は子どもたちにとっての負担も大きく、近年のエジプトでは複数の外国語を学ぶことをとりやめる議論もでています。2025/26 年度から本格始動したエジプト版「バカロレア」といわれる新カリキュラムでは、高等学校の卒業試験の成績に第二言語の点数を加算しない方針を示しました。ところが、この方針は「多くの要望」をうけて後に撤回されています (Youm 7 オンライン版記事, 2025 年 8 月 23 日付)。実は、歴史的に、外国語「で」学ぶ教育方法のあり方をアラビア語に戻そうという議論も含めて、エジプトではたびたび教育現場における外国語の取り扱いが問題になってきました(Reid, 1990)。しかし、結果的には、今日でも外国語「を」学ぶ機会も、外国語「で」学ぶ環境もエジプト人から多くの支持を集めています。エジプトの近現代の歴史を通じて、外国語教育はエジプト人にとって国外の専門的知識への重要なアクセス手段として、特に関心の高い分野のひとつであるといえます。

- Reid, D. M. (1990). *Cairo University and the Making of Modern Egypt*. Cambridge University Press.